The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	火星の人類学者たちの社会的包摂について : テンプル・グランディンと生存の技法について
Author(s)	池田, 光穂; 竹内, 慶至
Citation	Co＊Design. 2018, 3, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67890
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

火星の人類学者たちの社会的包摂について：テンプル・グランディンと生存の技法について

池田光穂（大阪大学COデザインセンター）
竹内慶至（名古屋外国語大学 現代国際学部）

Identifying Social Inclusion of Anthropologists on Mars: Temple Grandin and her Arts of Existence

Mitsuho Ikeda (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)
Noriyuki Takeuchi (School of Contemporary International Studies, Nagoya University of Foreign Studies)

著者たちは自閉症者で科学者のテンプル・グランディン（1947年生まれ）のライフコースの検討を通して、非自閉症者が多数派を占める社会への適応過程と自らのエンパワメントをもたらす生存の技法について考えようと思う。最初に、自閉症の診断方法の確立から自閉症スペクトラム障害の概念の確立までについての歴史を述べた後に、神経内科医で秀逸な医学的エッセー作家のオリヴァー・サックス（1933-2015）博士が、「火星の人類学者」を自称するグランディンの研究室への訪問記――それがサックスの同名の書名タイトルになる――を執筆する物語について検討する。火星の人類学者は、あたかも（地球の）異文化の世界に住まう人類学者が自分の共感的体験や思いを後回しにして、異民族の振る舞いを模倣することで、まず自分が持つ異文化に対する違和感を飼い馴らしてゆくという様を表現したもので、自閉症者のグランディンが非自閉症の地球人――この地上の大多数の人たち――の生活に合わせてゆく生存の技法そのものを示唆する。グランディンの手法は特殊なものではなく、我々がしばしば抱く社会での生きづらさを、人はどのように克服してゆくのかという知恵を、非自閉症世界の住人――我々のこと――に授けてくれるのである。

The authors discuss the life course of Dr. Temple Grandin (b. 1947) and her arts of existence that can tell us the story of her adaptive process and self-empowerment with non-autistic society. After briefing short story from emergence of concept of diagnosis of Autism to founding of Autism Spectrum Disorder(ASD), we narrate that a physician and author, Dr. Oliver Sacks (1933-2015) had visited to her university office and curious encounter story among them. “An Anthropologist on Mars” is the same title of Sacks’ one of best-selling books, also suggests that she called herself. To becoming anthropologist from Mars on Earth signifies her adaptive communicative strategy with non-autistic person and self-realization for coping with modern context of social inclusion. Her arts of existence represent and share with the competence of the ability of imagining the other across our society.

キーワード ―― 自閉症　テンプル・グランディン　社会的包摂　火星の人類学者
Keyword ―― autism, Temple Grandin, social inclusion, Anthropologist on Mars

1　なぜこの研究が重要か

自閉症スペクトラム障害（ASD）者である、テンプル・グランディン氏が、ASDではない者との共存を可能にするために身につけた「自分以外の人の生き方を想像する能力」がいかにして可能になったのかを考えることが、本稿の目的である。そして、（読者を含む）君がそして私たちが、他者を意識しながらも他者たちの圧倒的な同調圧力にめげずに「自分は自分である」ことを確信し、平安に、そして喜びのなかで人生を充実させていくための、「火星の人類学者」になる技法がいかに大切であるのかをここで主張するものである。

【目的】自閉症者への社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）が実現した際に起こる、ヘルスコミュニケーション人材として（高機能）自閉症者――ASD者――が参画できる在り方についての指針ないしは方向性を提出することが、ここでの当面の目的である。その人材養成には、コミュニケーション教育という具体的な課題も浮上する。

【方法】自閉症者（さまざまな呼称がある）の社会的包摂の文献を渉猟して、多様な個性をもつ保健領域の従事者の職域、特性、可能性について考察する。この報告において中心的に扱ったのはオリヴァー・サックス『火星の人類学者』、テンプル・グランディンとM・スカリアーノ『我、自閉症に生まれて』、竹内慶至編『自閉症という謎に迫る』、スティーブ・シルバーマン『自閉症の世界（原題：*Neurotribes*）』の4篇である。

【結果】自閉症者の社会的包摂は当然の趨勢であり、とりわけ既存の保健領域の実践者の意識改革や、そのための新しい制度設計が必要になることが明らかになった――より正確に表現すれば「そのように制度設計をすすめるべき」と私たちは主張したい。

【考察】自閉症者の社会的包摂プロセスは、それ自体がアクションリサーチの形態をとり、ピア（同僚や仲間）からの発語、提案、交渉という過程において、これまでヘルスコミュニケーション領域が探究提案してきた「対話モデル（dialogic model）」から「相互作用モデル（interactive model）」への転換が今後求められるだろう。

【附記】（1）個人情報の取り扱いについてはそれぞれ所属機関の研究倫理規定に準拠している。（2）利益相反（Conflict of Interest：COI）に関して、本研究課題は利害関係にあたる特定の団体や個人からも助成を受けておらず、COIに抵触しない。

2　自閉症から自閉症スペクトラム障害（ASD）へ

一群の奇妙な人たちに関する記録は、レオ・カーナーの1943年の論文を嚆矢とする。カーナーは、Kanner, L.（1943）, Autistic Disturbances of Affective Contact, *Nervous Child*, 2, pp.217-250.において、自閉障害という言葉をはじめて使った。では、情動的な接触が自閉により障害される（乱れる）とはどのようなことを意味するのか。それは「発達（development）」と「精神ないしは心の正常／異常（psychotic normal / abnormal）」が交錯するところに登場する。

自閉症（autism）はもともと統合失調症の下位分類（小児分裂病）としてスタートした。この30年間では、その分類をめぐっておよそ次のような変化がみられた。すなわち、（1）広汎性発達障害（pervasive developmental disorders, PDD）：ICD-10, 1990と分類されるもの。そして、広汎性発達障害は、（小児）自閉症、アスペルガー症候群[1)]、非定型自閉症およびその他の広汎性発達障害などに分けられていた。DSM-III, 1980では、幼児自閉症・全症候群存在とされたが、重要なことは、自閉症は精神病のカテゴリーではなく広汎性発達障害（pervasive developmental disorders, PDD）という新カテゴリーに位置づけられるようになったことである[2)]。次に、（2）広汎性発達障害：DSM-IV, 1995と分類されるもの。広汎性発達障害（PDD）は、自閉性障害、レット障害、小児期崩壊性障害、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害（PDD-NOS）に五分類された。PDD-NOSとは、pervasive developmental disorders not otherwise specified のアクロニム（頭文字略号）であり、前二者の残余カテゴリーである。自閉性障害、アスペルガー障害は、古典的自閉症の三基準を満たしていた。（3）DSM-IV-TR, 2000. は第4版の改訂版で、基本的にその枠組みが継承された。DSM-Ⅳ-TRでは、広汎性発達障害は次のように診断されるようになった。①対人相互反応における質的な障害、②意思伝達の質的な障害、③常同的かつ反復的な限定された行動、の三項目のうち、自閉症障害は3つの基準は満たしているもの、アスペルガー障害は②を満たさないもの、PDD-NOSは①もしくは③を満たさないもの。DSM-Ⅳ-TRの時点では、上述の①、②、③の三項目がPDDとされた。そして、その13年後の（4）DSM-5, 2013の登場である。ここで重要なことは、**自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder, ASD）**という新たなカテゴリーが登場し、以前は自閉症と診断されたものの大部分および以前はアスペルガー障害とされたものの大部分――具体的には上掲の障害（自閉性障害、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害）――が含まれることになった。DSM-5では、ASDは、①社会性の障害と②常同性の両方を満たす必要がある。このため、自閉症スペクトラム障害（ASD）という包括的カテゴリーが生まれるとともに、アスペルガー障害が独立した診断としては排除されたのである（クーパー 2015:85-86）。なお、スペクトラム概念の提唱者は、アスペルガー派のローナ・ウィング（Lorna Wing, 1928-2014）である。ASDは、自閉症の3つの特徴（1：対人コミュニケーションの永続的な欠陥、2：限局された行動、興味あるいは活動の反復的様式、そして、3：これらの徴候の小児期早期の発現、である）を満たすものとされている（大井 2013:24-25）。と同時に、（5）ASDとは別

に、社会的（語用論的）コミュニケーション障害（Social（pragmatic）Communication Disorder, SCD）が設けられた。これらの用語法の策定以降、新しい定義から術語が除外される一方で別のところから加わるという状況があり、さらに支援団体のロビー活動も加わったために、現場ではさまざまな混乱が生じた。DSM-5作成実行チーム委員長ディビッド・クッファーの度重なる発言にも見られる通り、この診断基準の設定には（医療福祉関係の）それまでの過剰診断への対応、コスト低減なども目論まれたようである。このような混乱についてはクーパー（2015）の第5章に詳しい。

DSM-5におけるASDの定義は、科学論的に考えても、診断のラベルを決め、適切な社会的ケアと治療手段（=寛解のための方策）の指針を決定することであり、病気の客観的な分類や病気の普遍性（=不変性）を意味するものではない。その扱いと、原因仮説についても、社会的ラベル説から、生物学的、脳科学的、遺伝的（エピジェネティクスを含む）、心理的、環境的な仮説まで多様である。しかし、それらの議論に入ると、ノミナリズムと本質主義のどうどうめぐりに入る危険性がある。したがって社会制度的な決定に影響する議論を除いては、これ以上は議論しない。

3　火星の人類学者を理解することの重要性

本稿の標題はオリヴァー・サックスの著作『火星の人類学者』に由来する。自閉症者でストレスフリーの屠畜装置発明者であるテンプル・グランディンと著者サックスの出会い=邂逅の物語である。サックスとのインタビューを通して、彼女自身の対人コミュニケーション感覚を「（自分は）火星からやってきた人類学者のようだ」と表現しているためである。

さて近年、自閉症スペクトラム障害（ASD）者への医学的介入の動きと同時に、当事者ならびに家族・支援者による社会的包摂への動きが盛んになってきた。ピアによるピアへの介入は支援ではなく社会的包摂状況における当事者へのエンパワメントの様相を呈するため、その関係性が変われば、その後は別種の社会参画のモデルが要請される。一般的にみて、火星の人類学者と表現されてきたものは、人類学者にとっての異文化経験のインパクトにおける疎外（alienation）や異邦人経験（alienated experience）を誇張的に表現した方法[3)]で、古くから言われてきたものである。メルロ=ポンティは『知覚の現象学』のなかで、哲学は哲学的内省のみならず、意図的に異邦人的傍観者になることの意義について指摘したが、（そのような修練を積んでいない）普通の人でもそのような潜在力を身に付けることがある。とりわけ、我々自身が、地球人の共通のしきたりや作法、あるいは思考法や正義について知っているはずなのだが、知らないうちに（例えば、犯罪容疑者にされてしまうと）それまで住み慣れてきた世界とは異なるもう一つの世界があることに気づかされる。そして、自分がどのような社会的位置にいるのかについて自覚し、その振る舞いを再学習する。この異邦人感覚をもつ契機は、マルクス主義や実存主義では、疎外（alienation）と呼び習わしてきたが、これは覚醒するプロレタリアートや「外に向け

て立つ（*ex-sistere*）」実存者になるための試練としても機能する。このテンプル・グランディンのケースも疎外経験や異邦人であることの自覚経験がそれに該当する。彼女はこの自覚体験を日記に書きとめ、そして自分の母親に相談した。母親は、グランディンに対して「新聞社からの依頼」を受けた時のように記録を残しておくべきことを伝える（グランディンとスカリアーノ 1993:167-168, 172-173）。この自分に対する自覚と記述経験は、文化人類学の用語ではオート・エスノグラフィー（auto-ethnography）[4]、つまり「自分自身を他民族の人たちのように外部から記述する方法手法」と呼ばれるものに相当する。そこで私たちは、火星の人類学者たちのソーシャル・インクルージョンのプロセスに大いなる関心をもって研究に着手することにしたのである。

そのために、まずオリヴァー・サックス（Oliver Sacks, 1933-2015）の同名のエッセー集『火星の人類学者』を調べることにした。この本は以下にのべるように、神経内科医のサックスの自閉症者への関心と、すでに『我、自閉症者に生まれて』をすでに出版していたグランディンのもとを訪問する探訪記ほか、自閉症の人たちの内的な世界や感覚の違いについて、神経内科医ならでは観察眼と洞察力にみちた書物である。同書の最終章である「火星の人類学者」は、サックスが、『自閉症の謎を解き明かす』の著者ウタ・フリス（Uta Frith, 1941- ）に出会い、その関心を述べたところ、サックスに対してフリスがテンプル・グランディン（Temple Grandin, 1947- ）に会いに行くことをすすめるエピソードからはじまる。サックス自身の言及や出版年から推察するに、1991年の夏の終わりのわずか3日間の2人の出会い＝邂逅を記録したものである。サックス58歳、グランディン44歳であった（彼は今から2年前の8月30日に亡くなり[5]彼女は今年70歳になる）。この最終章のエッセー全体のパラグラフ単位の解析は、池田のウェブサイト「火星の人類学者」（https://goo.gl/uf7PYm）に公開しており、この発表の資料等もそれらに依拠している。この解析から得られた結論は次の4点にまとめられる。

（1）テンプル・グランディンは、自ら火星の人類学者として自己認識し、自閉症以外の人と付き合いができ、社会的にも研究者として、そして経営者としても成功してゆく。その理由は、彼女がその生活史の過程のなかで、火星の人類学者として自閉症以外の地球人を「文化相対主義」的に把握していったことに他ならない。

（2）グランディンは、人の感情の動きを、自身の共感をもって把握することができない。しかしながら、それを過去において他者のパターン化された行動とそれに対する情動の組み合わせについて、膨大な記憶のストック（彼女はCD-ROMと呼ぶ）があり、そこから経験のパターンを引き出すことで、非自閉症（non-ASD）の人に「合わす」＝チューニングすることを可能にしているようだ（サックス 2001:392）。この見解は、グランディンの自己解釈と、サックスの参与観察との総合的な結果であろう。この事実は、エッセーの終末の部分で、感極まったサックスがグランディンとハグ（抱擁）[6]をして別れるのだが、その時の交流の情景の中に見事に描写されている（サックス 2001:398）。

（3）サックスは、参与観察の途中で気がついた、グランディンが使う自己認識ラベル＝火星の人類学者を通して、彼女との邂逅の2泊3日間（約48時間）を、今度は彼自身が地球の「人類学者」として振

る舞うとともに、彼女が一生懸命インフォーマントして答えようとしているのではないかと考えるようになる。すくなくとも、サックスは、出会っているあいだ、さまざまな質問をし、グランディンが誠実に、だが同時に奇矯なかたちで応答したかのような人類学的調査の「形跡」がエッセーの随所にみられる。

(4) 我々は、サックスの肩越しに、グランディンとは誰かという問題にアプローチした。サックスを通してだが、グランディンがどのような「火星人」であるのかを把握することができた。したがって、これは、火星の人類学者と、地球の人類学者による対話篇として読むことが可能なのである。より正確には哲学的対話篇というよりは「人類学的対話篇」ないしは地球人による「火星の人類学者の民族誌」なのだ。サックスは後年になりこの対話のエピソードを想起して、彼女が「さまざまな点で、他人の心の中で起こっていることをほとんど理解していないことは明らか」とまで断定している（サックス 2015:391）。その言を信じれば、グランディンには「マキャベリ的知性」が非常に希薄であったということになる（これについては註の（11）を参照）。

ASDではない地球人どうしの相互作用（interaction）を、火星からやってきた人類学者グランディンがどのように学んだのかについて、地球の人類学者の役割を買って出たサックスが、火星の人類学者とのインタビューと相互作用の観察という人類学的相互作用を通して明らかにした作品が「火星の人類学者」なのである。

4　考察：本稿で考えたいこと

本稿で考えたいことは、次の3つのポイントである。それらの課題と、課題設定にまつわる問題点を提示しておこう。それは、（a）社会的包摂としてのASDのノーマライゼーション過程の推進、（b）ASD者を含む異才発掘と、その能力の社会的利用、そして、次がもっとも私たちが関心を持つテーマであるが、（c）この奇妙な「火星の人類学者」たちは、どのように地球（＝この社会）に居場所を見出し、地球人に「承認」[7]されようとするのか、である。

（a）社会的包摂としてのASD者のノーマライゼーション過程の推進

基本的なコンセンサスは、皆が多様性を重視し、尊重し、お互いの存在の承認のもとで共存することである。これは「火星人」をあくまでも比喩であり、地球人どうしの多様性をみとめよう、私たちはみな「同じ」地球人だ！ 地球人どうしの平和的共存というテーマに連なる。表現型は異なるが遺伝型は同じ同胞の共存である。あるいは生物種としての人間の共通性に着目しようという立場である――このことは必然的に生物種としての人間（＝地球人）中心主義を導くこともある。もちろん、このようなことを否定し、人類中心主義文化の美風に抵抗する人たちもいる（ピアス 2016）[8]。

(b) ASD者を含む異才発掘と、その能力の社会的利用

社会が特異な才能のある人に価値を見出し、その利用を通して社会のイノベーションを試みることは、そのような異能を持たない多数派の正常人（凡庸人とも言う）たちのための有効活用という都合のよい論理に合理化されやすい。そのため、そのようなタイプの異能が利用されない場合や、期待通りの成果が上がらない場合、その人たちに対する価値下落は決定的になる。あるいは、ASD者に対して見えない選別と差別が新たに始まる可能性がある。この価値の変動を握るのは、もちろんASD者ではなく、多数派の凡庸人たちである。多数派の凡庸人たち、すなわちヘゲモニーを持った我々の意識改革は不可欠であり、本発表（本稿）を決意した動機もここから出発している。

(c) この奇妙な人たち「火星の人類学者」は、どのようにして地球（=この社会）に居場所を見出し、地球人に「承認」されようとするのか?

このプロセスがわかって、多数派の凡庸人たちにいったいどんなメリットがあるのかという反論があがるはずである。私たちは、オリヴァー・サックスの「火星の人類学者」の読解を通して、「私」と「私たち」が属する社会の人たちが抱く2つの現象を見出した。ひとつは（c-1）**ASD者が社会的承認を得るためにおこなってきた実践的努力**である。これは文化人類学者が見知らぬ異文化で自己の社会的承認を得るためにおこなう実践の技ときわめて類似している。そして、もうひとつは、フィールドワークで人類学者が学生・院生や一般の人々に対して、文化人類学がとてもヒューマニスティックであることを表明する際に主張する、（c-2）「**ともに喜びあい、ともに感情を分かちあう経験」への疑義ないしは相対化**である。つまり火星人を地球人化する企みは、双方の文化理解のための必須条件である必要はないという「予感」である。この最後のことを以下に補足説明しよう。

地球上でサバイブし活躍する「火星の人類学者」グランディンが、その居場所を見出すための技の行使――例えば自己をCD-ROMとして地球人の行動とその変化の膨大なレパートリーを記憶ストック化していたこと――を思い起こそう。それは、人類学者が調査対象である異文化の社会の中で調査者として身に付ける技の行使とよく似ている。言い換えると、グランディンは「火星の人類学者」としてアイデンティティを自ら発見（=定義づけ）し、自分自身を、この参与観察可能な社会（=地球）への適応プロセスとしてサックスに語る。これは自己ならびに自己の方法論を、サックスに提示したことにほかならない。石川准（1992）は、これまで自己同一化と訳されることが多かったアイデンティティを「存在証明」[9]と訳しているが、グランディンは自分が火星の人類学者の「ような」アプローチを通して、結果的に火星の人類学者として地球人の住民からその存在の権利を認められた（=承認された）ということができるのである。

なお、私たちはこれまでASD者とひと括りにしてきたが、グランディンのような「聡明な」ASD者は少数派であるかもしれない。多数派の「定型者」が凡庸人なのと同様に、多くのASD者もまた平凡な「フツー」の人々なのかもしれない。その意味でグランディンは、エリートASD者かもしれない。また、グラン

ディンの人生の軌道（trajectory）がもつそれ以外の可能性についての考察についても不十分であった。つまり私たちは、グランディンの人生経路のなかにおけるASD者だったという経験を過度に強調し、かつ彼女の複数の人生経路の可能性を除外し、ASD者でもASDでない者でも、結果的に到達した彼女の「社会的な成功」という単線的なストーリに蠱惑された可能性もある。つまり彼女以外の「火星の人類学者」たちが歩んできた／歩んでいるはずの複線経路・等至性（trajectory equifinality）のダイヴァーシティの可能性を過小評価している可能性がある。これらはこの発表（論文）の限界であり、今後のさらなる課題としたい。

5 結論

私たちの立論の細部おける今後の課題を踏まえてもなお、私たちは、グランディンは、自分の認知プロセス（＝ASD者がもつ自文化中心主義）の相対化、すなわち彼女自身の文化相対主義を通して、異文化である地球人社会の中でよりよく生きることを実践するようになった、と結論づけることは誤りではないだろう。

グランディンが実践する、文化相対主義とは、静態的で固定的な「文化概念」にもとづく認識論的な相対主義ではなく、他者に対して、自己とは異なった存在であることを容認し、自分たちの価値や見解（＝自文化）において問われていないことがらを問い直し、他者に対する理解と（「応答責任」という）相互作用のことである。それは言い換えると「火星の人類学者」がこの地球上で生きてゆくための倫理的態度、すなわちパフォーマティブな相互行為のことを指し示す。それゆえに、私たちは、グランディンが会得している実践ないしは生き方の方法論を「生の技」あるいは「存在の技法（*arts de l'existence*）」[10]と呼んでもいいだろう。

ここから派生的に、ASDでない者が会得すべき課題が浮上する。それは、テンプル・グランディンから私たちが学んだこと、すなわち「自分以外の人の生き方を想像する能力」の陶冶は、すべての人間（＝宇宙人）が会得すべき（命令語法を帯びたような）徳目などではなく、人間に備わっている本来の能力の一端であることを理解することである。これが対話モデルから相互作用モデル[11]への転換ないしは拡張が必要だと、私たちが主張する点である。

支配者、主人、権力を持つ者、差別者、ASDをコントール可能だと思っているASD以外の人たちは、「自分以外の人の生き方を想像する能力」がなくても生きてゆくことができる。また、その必要性を日常生活のなかで感じることは少ないだろう。しかし、被支配者、奴隷、権力を持たない者、被差別者、そしてASD者たちは、それらと非対称的な関係にある存在者との権力関係のなかで、サバイバルのために「自分以外の人の生き方を想像する能力」を持たざるをえない。つまり、彼／彼女らの志向性は自閉どころか自己の外に向かっているのである。それが自らを閉ざす者という自閉症スペクトラム障害

（ASD）の語法（＝命名）のパラドクスである。さらに、それに加えて、ASDに対する診断のパラドックスもみられる。つまり、ASD者は、他者に対する想像力の欠如がその特徴のひとつと診断されているにも関わらず、実は（火星の人類学者のように）他者に対する想像力を働かせているという矛盾である[12)]。

これは情動的共感という経験を通さずとも、グランディンが身に付けた技法の歴史的記録である。それは、知的な火星の人類学者が地球人とは少し異なった方法で身に付けた、「地球人の生き方を想像する」もうひとつの能力の会得による。このことは発表者の一人（池田）にはデジャ・リゥ（déjà lu）すなわち既読感であった。時代も社会的背景も、そして議論の内容も違うある思想家の伝記についての言及の中にあった示唆に富む文章である。それを紹介して、この報告を閉じることにしよう。その思想家とはラトビア出身のユダヤ人アイザイア・バーリン（Isaiah Berlin, 1909-1997）、その評伝を書いたのが、政治家であり作家でもあるマイケル・イグナティフ（Michael Ignatieff, 1947- ）である。

「悲劇的な人生を送らなかった人間がどうして悲劇的な選択をこれほど強調し、内的な衝突に苦しめられている人たちにこれほど共感するのか。彼（＝バーリン）の答えは簡単だった。『私の人生は私の見方とは反対である。私はすべての選択は苦痛に満ちていると思うが、選択が自分にとって苦痛だとは思わない』。もしそれが本当だったとしたら、彼の仕事は、自分自身の人生ではなく、自分以外の人の生き方を想像する能力に負っていたのである」（イグナティエフ 2004:315）。

謝辞

本稿に関する資料収集には大阪大学COデザインセンター平成29年度「高度汎用性のあるトランスサイエンス研究シーズ支援事業」の支援を受けた。また地球人が使う質的研究手法と「火星の人類学者」の方法論については同大学同年度の全学共通大学院科目COデザインセンター科目「訪問術A」で、「訪問術B」の授業において教材として取り上げ検討した。また研究初期で認知症者との比較考察したことが、この研究に結実したが、それは科学研究費補助金・基盤研究（B）「津波被災後の高齢者の外傷後成長と認知症に関する学際的研究－老いの成熟を目指して」（代表者：野村亜由美・課題番号：25305025）による。以上の関係者に感謝する。

註

1）アスペルガーとは、自閉症研究のもう一人の創始者であるハンス・アスペルガー医師の瞠目すべき論文に由来するものである（1946［1996:83-178］）。

2）診断基準により分類されるのは次の4障害である：infantile autism, childhood-onset pervasive developmental disorder, residual infantile autism, and residual childhood-onset pervasive developmental disorder.（Volkmar et al., 1988:1404）.

3）人類がイマジナリーな世界のなかで初めて火星人と遭遇したのはH.G.ウェルズの小説“The Crystal Egg”（1897）,“The War of the Worlds”（1898）［邦題：宇宙戦争］であり、特に世

界的に有名になり数々の映画にもなった後者の作品は、異形の火星人との暴力的な出会いに満ちていた。これは同時期におこった南アフリカにおける植民地争奪戦争であるズールー戦争（1879）やそれに引き続くボーア戦争（1880-1881, 1899-1902）において実際に遭遇し血みどろの戦闘をしかけてきたズールー人戦士に対する英国植民者や軍人が抱く潜在的恐怖を表象するものと言っても過言ではない。冷戦期のアメリカ映画“Invasion of the Body Snatchers”（1956）［邦題：ボディ・スナッチャー］では、知らない間に隣人が宇宙人に乗っ取られてしまい、地球人が少数派になるという、共産主義思想への恐怖を見事に表現したものであった。他方、三島由紀夫の長編小説『美しい星』（1962）は、家族全員が、それぞれ太陽系からやってきた異星人（と自己認識している）で、この家族が地球に迫った核戦争を防止しようと奮闘する話である。三島は、盟友ドナルド・キーンに英訳を懇願したが、逆にキーンのほうが気に入らずついに翻訳はならなかった。アメリカと日本の間での「美と政治意識」の葛藤を、そこに見ることができる。三島のこの作品は、その後現在に至るまで注目を浴びることはなかった。

4）オートエスノグラフィ（auto-ethnography）という用語は、明らかに西洋の文化的記述には書かせない自伝（auto-biography）という用語とその伝統を踏まえたものだ。しかし、後者が自分の内奥からわき出る経験を素直に書き出す――その原形はアウグスティヌス『告白（*Confessiones*）』（397-398）といわれる――というスタイルを示唆する。それに対して、前者は近代の民族誌（ethnography）という方法論の確立を踏まえて、自己を他者化するという経路を迂回することで、自己と他者との関係を三角測量するように描き出す第三の視座を取ることと関係している。

5）サックスは亡くなる同じ年の2015年に自伝『道程（On the move: a life）』を出版しており、グランディンらを「神経学的欠陥」ではなく「異なる生き方」をしている人であると主張している。そして他方で、「病気」は彼らの生活の根本であり独自性や創造性の源泉であるという。それは彼らが「さまざまなかたちで障害を補う能力」を持つからである（サックス 2015:390-392）。

6）ハグ（抱擁）の体験とそのレトリックは、グランディンにもまたサックスにも「火星の人類学者」の内的経験を知るには最も重要なものである。グランディンは、これまで両親や親族からハグをされることに異様なまでの恐怖（時に無感動）を育んできた。しかし他方で、彼女は、牧場や屠畜場で家畜を大人しくさせる牛桶や締め付け機に「異様な関心」を持ち、思春期にはすでに自作し、自らその中で安らぐことを覚えた――これは周囲の大人に「異様なほどの嫌悪感」をもたらしたらしい。やがて大人になったときに、その設計までを手がけ、最終的にそれを含む屠畜場の総合デザインを自分の天職にまでした。サックスは、事前の彼女の自伝の読書と3日足らずの邂逅の間に、彼女にとってハグ（抱擁）がもつ、矛盾に満ちた複座な意識の意味に着目し、グランディンと自分のハグ体験を、動物の締め付け行為との比較検討を通して、ASD者ではない者とのコミュニケーションの技法――ただしそれは共感的理解には基づかない――を身に付けたのではないかと推測する。

7）スティーブ・シルバーマン（2016）の原著名は「神経部族（*Neurotribe*）」という新造語を用いているが、著者のその意図は明確である。自閉症者は、私たちの社会のなかの認知と承認を待つ新し

い「部族」の存在を示唆しているからである。これは著者の一人（池田）が現在研究している、少数民族や先住民「部族」が国際社会に求めている「民族=ネーション」としての承認要求に関連するように思える。彼らは「先住民」としての国際社会における権利主体としての「承認（recognition）」――ヘーゲル『精神現象学』のそれ――を求めているからである。

8）フレッド・ピアス（2016）の著作は、世界の各地で我々が特定外来種と呼ぶ生物種を、地元の固有種を守るために、選択的に排除することの生態学的な評価を行う科学ジャーナリズムの佳作である。しかし彼の思索は、この現象にアプローチしながら、固有種の生物種の保全思想そのものは人間が生物種の相互関係を管理できるという発想に基づいており、外来種を排除する手法は、いつのまにか外国人や障害者を我々とは別のカテゴリーに分類し、排除したり管理したりするやり方と同形であることを批判している。

9）アイデンティティの訳語を「存在証明」としてもいっこうにかまわないが、1）誰に対する、2）どのような存在様態の、そして3）証明の名宛て人（=神などの超越存在もかまわない）は誰か、という位相を明らかにしないと、その言葉のずらしは十分に学術用語として昇華しきれないだろう。地球人と火星人の間のそれらの組み合わせがすべて異なるという多元的存在論のカオスに説明の論理が開かれてしまうからである。

10）存在の技法はミッシェル・フーコーによるものであり、一般的には《生存の技法》と研究者において呼ばれているものである：「その総体とは《生存の技法arts de l'existence》とでも名づけていいものである。それは熟慮や意志にもとづく実践であると解さなければならず、その実践によって人々は、自分に行為の規則を定めるだけでなく、自分自身を変容し個別の存在として自分を変えようと努力し、自分の生を、ある種の美的価値をになう、また、ある種の様式基準に応じる一つの営みと化そうと努力するのである」（フーコー 1986:16）。

11）オランダのアーネムにあるブルゲルス動物園のチンパンジー飼育園のイエルーン（Yeroen）は、それまでは普通に歩いていたにも関わらず、過去に争いで自分にケガを負わせたニッキー（Nikkie）の前では跛行するという演技が、霊長類学者フランス・ドゥ・ヴァール（1984）らに発見されて以降、チンパンジーには何らかの意味で〈相手が自分をどのようにみているのかという認識〉が明確にみられることが明らかになった。このタイプの認識を進化心理学の術語では「マキャベリ的知性」と呼んでいる。いずれにしても、ここでの私たちの含意は、火星人とのつきあいのなかで我々は社会学者アーヴィング・ゴッフマンと共にチンパンジーのイエルーンから学ぶことが多いということである。

12）このことを寓意により表現すると、すべて嘘つきと島外人によりラベル化されたクレタ島人の発言の「真意」はその真逆の解釈により実はパラドックスに陥ることなく島外人により「真実」を発見できると当の島外人が糠喜びする様である。ここでのクレタ島人とはASD者、島外人とはASDを診断する者のことである。

引用ウェブサイト

- 火星の人類学者（2017年11月30日確認）
http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/16misamaON_Mars.html
- 火星の人類学者の参画について（2017年11月30日確認）
http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/Anthro_Mars_health_com2017.html
- 火星の人類学者の方法論入門（2017年11月30日確認）
http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/17anthro_mars.html

文献

- アスペルガー・ハンス（1996［1946］）「子供の『自閉的精神病質』」（ウタ・フリスの英訳からの重訳）. フリス・U.『自閉症とアスペルガー症候群』：83-178, 文献リスト：439-440.
- クーパー・レイチェル（2015）植野仙経・村井俊哉訳『DSM-5を診断する』日本評論社.
- ドゥ・ヴァール・フランス（1984）西田利貞訳『政治をするサル』どうぶつ社.
- フリス・ウタ（1991）冨田真紀・清水康夫訳『自閉症の謎を解き明かす』東京書籍.
- フリス・ウタ（1996）冨田真紀訳『自閉症とアスペルガー症候群』東京書籍.
- フーコー・ミッシェル（1986）田村俶訳『性の歴史 II 快楽の活用』新潮社.
- グランディン・テンプルとマーガレット・スカリアーノ（1994）カニングハム久子訳『我、自閉症に生まれて』学研.
- イグナティエフ・マイケル（2004）石塚雅彦・藤田雄二訳『アイザイア・バーリン』みすず書房.
- 石川准（1992）『アイデンティティ・ゲーム』新評論.
- Kanner, L. (1943), Autistic Disturbances of Affective Contact, Nervous Child, 2:217-250.
- 大井学（2013）「自閉症をめぐる五つの謎」竹内編『自閉症という謎に迫る』：12-56.
- ピアス・フレッド（2016）藤井留美訳『外来種は本当に悪者か?』草思社.
- サックス・オリヴァー（2001）吉田利子訳『火星の人類学者』ハヤカワ文庫, 早川書房.
- サックス・オリヴァー（2015）大田直子訳『道程』早川書房.
- シルバーマン・スティーブ（2017）正高信男・入口真夕子訳『自閉症の世界』ブルーバックス、講談社.
- 竹内慶至編（2013）『自閉症という謎に迫る』小学館新書, 小学館.
- Volkmar, Fred R. et al. (1988), DSM-III and DSM-III-R diagnoses of autism. American Journal of Psychiatry 145（11）:1404-1408. doi.org/10.1176/ajp.145.11.1404

（投稿日：2017年11月30日）
（受理日：2018年1月10日）